震災の記憶

本多真理

（駒場町会防災の夕べでの講演から）

震災当時、私は兵庫県芦屋市翠ヶ丘町の社宅に家族４人で住んでいました。　JR 芦屋駅から東へ徒歩 15 分程の住宅地で、西宮市にすぐの場所です。

1995 年 1 月 17 日は連休明けの火曜日でした。早朝 5 時 46 分、最初にゆらゆらする程度の揺れを感じた時に、隣で寝ている主人がすぐ“ 地震だ ”と私を起こしましたが、地震の少ない西宮で生まれ育った私は、“ すぐ収まるわよ ”と答え、再び寝ようとしました。　とその瞬間、突然背中の下から突き上げるような揺れが起きたのです。　まさに、ゆらゆらからぐらぐら、どかんどかんと変わったのです。

思わず頭から布団をかぶりましたが、　体がえびのように跳ねて、必死に自分の身を守っていたように思います。

どれ位で収まったのか、地震が静まり呆然としていると、私と主人の上に、タンスの上半分が外れて倒れかかっていて、主人が“ 君が出ないと出られない ”と言いました。　厚い掛け布団が幸いしたのでしょうか、怪我がなかったのが不思議なくらいでした。　いつも明け方になると私の布団に入りこんでくる 5 歳の息子がなぜか側にポツンと座っていたのが印象的でした。

子供部屋の二段ベッドの上では 6 歳の上の娘が泣きながら座っていました。　本棚が倒れ足の踏み場もないほど物が散乱していて、一人で降りられる状態ではありませんでした。とっさに、このまま再び地震が起きると建物の中に居るのは危険だと思いました。　また直後にご近所の方が “ ガス臭いのでろうそくは付けないで外へ避難して下さい ”と言って回っておられ、　家に居ても停電でテレビが付けられず様子がわからないので、とにかく直ぐに普段着に着替えジャンバーを着こみ、　建物の前に駐車している車の中に入りました。ご近所の方も次々と皆、車の中に避難しました。

ところがカーラジオのチャンネルをどこに合わせても地震について何も伝えてはいませんでした。　こんなにすごい大地震が起きたというのに普段どおりのラジオ番組。　いったいどうなっているのだろう、もしかしたら東海沖地震が起きたのではないだろうかと、主人の実家のある静岡を心配したりしていました。　情報が得られないのは本当に不安でした。

また視力の良い方には笑い話でしょうが、慌てていて眼鏡を家に置いてきてしまったので、良く見えず余計に不安でした。

時間が経つにつれ気持ちも少しは落ち着いてきたので子供たちと家に戻りました。 室内を改めて見回してみると、あまりの惨状に驚くよりほかはありませんでした。

最もひどかった台所では、食器棚や冷蔵庫が倒れ、割れるものは全て割れている状態でぐしゃぐしゃでした。 揚げ油が入ったままのお鍋がひっくりかえり周り一面べたべたになっ

ていました。 調味料が散乱してお醤油や油の入り混じったなんともいえない匂いがしていました。 リビングではテレビや金魚の水槽が棚から落ち、砂利と水でホットカーペットがびしょびしょでした。 また書棚のあった部屋は物で押されているのか戸が開かず、やっとのことでこじ開けてみると、動いたピアノ目掛けて倒れた書棚がばらばらに壊れていました。部屋中割れたガラスと本が散乱していてピアノの上の部分がその衝撃で欠けていました。もしこの部屋にいたらどうなっていたのだろうと思いました。

家の中は割れた物が散乱しており、危なくてスリッパ無しでは居られませんでした。ガラスの海の台所から真っ先に片づけました。 倒れた食器棚を何とか起こしましたが、その際中に辛うじて助かった食器も滑り落ちて随分割れてしまいました。 箒と塵取りで割れた食器を集めました。 割れなかったものも、ガラスの欠片できらきらしていて、全部洗わなければなりませんでした。 その時点では、社宅が貯水槽でしたのでまだ水が出ていました。 断水になるとは想像もしていませんでした。

軍手をして注意していたつもりでしたが指先を切ってしまいました。 電気が通じたので掃除機もかけましたが、 割れた物をざらざら吸ってしまい調子が悪くなってしまいました。当然ですが割れた物、壊れたものは全てゴミになるわけで、それは大変な量でした。 片づけながら、なんて多くの物に囲まれて住んでいたのだろう、と思いました。 また余談ですがこんな時にもかかわらず習慣で、いつもの様にゴミを分別していました。

社宅内のゴミ収集場所には次々とゴミ袋が積まれました。 誰が何時収集するのかも考えず、とにかく室内の居場所を確保するために皆がゴミを外に出しました。

比較的暖かな快晴でした。 ベランダから遠く南のほうを眺めると火災が起きたのか黒い煙が立ち昇っているのが見えました。 片づけているこの間にもっと大変な災害が他の地域に起きていることを、私は夢にも思いませんでした。

想像を超える地震だと始めて思ったのは、同じ社宅の方が出勤しようと急いで芦屋駅まで行ったところ、駅が無くなっていると帰って来られたからでした。 また社宅の隣の民家が全壊で、その家に住む方が助けを求めに来られたのでした。 この時、男性達が救出に向かいましたが道具が無ければ建物を動かす事が出来ず、軍手と長い棒はないかと、主人が家に戻ってきました。 幸い取り残された方はお怪我も無く無事に助け出されました。

午後から既に水が出なくなってきていたのですが、 前の晩のお風呂の水を捨てずに取っておいたのでそれをお手洗いに流したり洗濯に使えてとても役立ちました。 飲料水は買い置きのペットボトルの水がとても助かりました。

夕飯は電気が通じていたので御飯を炊いて冷蔵庫の残り物で済ませました。 余震が続いていたので、またもっとすごい地震がこれからくるのではないかと不安で、その夜は枕もとに靴を置き服を着たまま寝ました。 用心は悪いのですが、玄関の扉や窓は、建物が壊れたら出られないと思い、鍵を開けたままでした。

地震の翌日は朝から頭上をヘリコプターが大音響で飛んでいました。 時には会話がかき消されるくらいの音で、思わずベランダから空を睨みつけていました。 前日半分興奮状態

で片づけをしていたからなのか、二日目は朝から気分がすぐれずコタツにじっとしていました。　テレビでは当然のことながら地震の映像だけが流れ、亡くなった方の名前を知らせる番組をずっとやっていました。 どうぞ知った名前が出ませんようにと祈るような気持ちでしたがどんどん自分が落ち込んでいきました。　また東京のスタジオからの番組では、もし関東で起きていたらどうなるのかとか、関西人は地震の備えをしていなかった、等と有識者と言われる方々が話をしていて、冷静に分析されればされるほど気持ちが追いついていきませんでした。 温度差があるとは言え被災地の気持ちに沿った内容の放送をお願いしたいものだと思いました。　しかしこのことで、同じ様な場面でおそらく私自身が無神経なことを言っていただろうとわが身をふりかえることに繋がりました。

　　昨日まであれほど情報が欲しいと思っていたのに、今度は情報に窒息しそうで、テレビを見続けることは出来ませんでした。 子供たちとぼんやりドラえもんのビデオを見ていました。

　その日の夜に、大阪と京都から社員の方が社宅にお弁当と水と紙おむつを届けてくださいました。　それは本当に有りがたく言葉で言い表せられないほど嬉しいものでした。このあと、社宅としての避難について議論がなされ出来るだけ家族は実家に帰るようにと指示が出されました。　阪急電車が西宮北口駅まで通じているので、約二駅間歩いてそこまで出れば東京方面には帰れそうだ、ということでした。

　しかし私の実家は社宅から歩いてすぐの場所なので、 両親を置いて芦屋を離れるわけにはいきませんでした。　両親にも、余震が怖いことと、水とガスが無ければ生活が出来ないことを説得して、取り敢えず大阪の叔父の家に避難してもらうことにしました。

　避難するにあたってはそれぞれ 3 家族ずつくらいのグループに分かれ時間を決めて集合し社宅を出発することになりました。　私たちは 4 日目の朝に出発しました。　暖かな日でしたが頭を守る為に皆帽子をかぶり、手袋をしてリュックを背負っていました。 衣類以外に通帳や保険証、　そしてその時は、もしかしたらもう社宅に戻れないかもしれないと思い、子どもが生まれた時から撮った写真のミニアルバムを詰め込んでいました。

　社宅を出てまず夙川駅を目指しましたが、周りの様子は私が慣れ親しんだ美しい景色とは一変していました。 崩壊した家が道を塞ぎ、友人の住むマンションが線路にそのまま落ちていました。 自治会館がぺしゃんこでした。 道も隆起しているところがありました。 通れるはずの道が通れなくなっていましたがとにかく東へ東へと歩きました。 西宮北口駅を目指しなるべく最短コースの線路沿いの道を進んで行ったのですが、 阪急神戸線の夙川駅を過ぎた辺りでは線路がジェットコースターのレールのようになり、　架線が垂れ下がり、道路上もところどころ電線がぶらぶらしていて恐ろしかったです。 時々余震がくると、とっさに頭を手で覆って地面に伏していました。 幼かった子供たちも妊婦の方も頑張ってよく歩いたと思います。

　避難していく私たちの流れと対向するように反対方面からも大きなリュックを背負って大勢のひとがすれ違っていきました。　離れ離れになった家族を訪ねていく人、会社単位の

集団、ボランティア…色々な方達でした。

2～3 時間位で西宮北口に無事到着しましたが駅は大混雑でした。券売機に並ぶ人でごったがえしていましたが、数人の駅員さんがてきぱき直接梅田までの切符を売っていました。電車は通勤ラッシュのような状態でした。 駅を発車ししばらくは地震で倒壊した家屋が多く見られましたが、武庫川を越え尼崎市に入るとだんだん様子が普通と変わらない景色に変わっていきました。 そして終点の梅田駅を降りると丁度 1 月のバーゲンの真最中でとても華やいだ雰囲気でした。 バーゲンを目指す人たち、地震を全く感じさせないで機能しているお店やレストランに違和感を感じたのは私だけではなかったでしょう。 “ あっ、普通なんだ ”。 これが最初に梅田で感じた気持ちでした。 特急でたったの 20 分の距離であっても、梅田を行き交う人と電車からはき出される人の感覚はそれ以上のもっと離れたものでした。 2～3 日満足に顔も洗えないで、リュックを背負ってひきつった表情で梅田に降り立ちましたが、怪我もせず無事であったことを喜びました。

私たちはその夜会社が手配してくれたホテルに一泊しました。 主人は駅からそのまま会社に出勤しました。 こんな時でも大阪の職場は普通に機能しているのです。 それが現実でした。

家族一緒に過ごした翌朝、新幹線に乗り三人で主人の実家に向かいました。 その後主人はしばらくの間、電車が西宮北口までしか通じていなかったのでビジネスホテルから通勤し、数日間社宅へ戻るという生活を続けました。

私たちは水道が復旧したのを受け 3 月 7 日に芦屋に戻り、子供たちもそれぞれ小学校や幼稚園に通い始めました。 ガスがなかなか復旧しなかったので、お風呂はリュックを背負って外に入りに行きましたが、食事の仕度はカセットコンロがとても役に立ちました。 御飯を炊くのにシャトルシェフというお鍋は便利でした。 水が出たこの頃からクラスの友達も少しずつ戻って来て下の子の卒園式も無事 3 月 21 日に終わりました。

改めて振り返ってみますと、被災の状況はほんのちょっとした違いから変わってきますから、こうしておけば絶対大丈夫ということはなかなか言えません。 しかしひとりひとりが命を守る為に出来る範囲で備えをする事はやはり大切な事でしょう。 私の体験から何かお伝えする事が出来ましたら幸いです。

☆ 不必要なものは増やさない …凶器になります

☆ 建物の耐震を考える

☆ 作り付けの家具がベストですがそうでない場合でも固定する…万一倒れても逃げる時間位は稼げます

☆ 食器棚などは観音開きより引き戸のほうがよい

☆備えておくと良い物

＊飲料水は家族分をペットボトルで３日分位用意、これは絶対です

＊生活用水をお風呂の残り湯かベランダなどにポリタンクで。トイレを流すのに助か

ります

＊冷蔵庫の中身をいつもちょっと多めに詰めておく

＊洗えないので取り敢えず紙皿なども便利

＊缶切りやはさみなど

＊カセットコンロとボンベ

＊非常用ラジオ

＊　軍手　厚手のビニール手袋

＊　割れた物を入れることが出来るダンボールかゴミ袋　雑巾

＊　自転車　歩きやすい靴　リュック　水用の空のポリタンク　水筒 2〜3 本

☆　ベッドの側にいつも用意しておくと良い物

非常用ラジオ、眼鏡、着替え、スリッパ